
不登校生徒を出さない、なめらかな小・中学校間の連携 —中1ギャップ予防プログラムの作成と活用を通して—

藤岡市教育研究所

■所長 岸 正博

■執筆者

藤岡市教育委員会 指導主事 山田 雅彦

■研究者（平成20年度所属）

藤岡市立東中学校 教諭 諏訪部光昭

藤岡市立美九里東小学校 教諭 中尾 典子

（平成21年度所属）

藤岡市立西中学校 教諭 足立 晋

藤岡市立平井小学校 教諭 宮崎 香澄

■住所 〒375-0024 藤岡市藤岡1485番地

■電話 0274-50-8212

■URL http://www.city.fujioka.gunma.jp/f_gako/



1 はじめに

藤岡市においては、平成19年度に小学校6年次から中学1年次にかけての不登校生徒数の出現数は5倍に増え、いわゆる「中1ギャップ」問題が顕著に表れてきた。そこで、平成20年度より「中1ギャップ」を予防する手だてについて研究を進め不登校の解消を目指すこととなった。

2 研究の概要

(1) 基本的な考え方

ア 「中1ギャップ」とは

小学校卒業から中学校入学は、子どもたちを取り巻く環境に大きな変化をもたらす。具体的には、教科担任制や部活動、制服や規律等、学校の制度上のこと、勉強の質や量、定期テストや通知票、教師の指導の仕方などの学習面でのこと。新しい友だちや部活動での先輩後輩等、人間関係上のことである。入学したての中学1年生に実施した「6年生の時

に不安に思っていたこと」調査の結果から、これらの変化がもとで多くの悩みを持つことが、明らかになった。

このように「中1ギャップ」とは、小学校から中学校への移行期間に、実際に起こる環境のズレと生徒の心に感じる「ギャップ」ということができる。そして、その「ギャップ」が誘因となって、中学1年生のいじめや不登校生徒の数が6年生の時に比べ、急が増加するという現象面の「ギャップ」が発現することと捉えた。本研究では、特に、不登校生徒の出現について焦点を当てて研究することとした。

イ 「中1ギャップ予防プログラム」とは

中1ギャップ出現の要因と考えられる現象に対して、一つ一つ手だてを講じていくことを基本姿勢とした。その手だてとする内容を小6から中1までの2年間の指導の中にプログラム化すれば、中学1年生での不登校生徒の出現を未然に防ぐのに役立つのではないかと考えた。

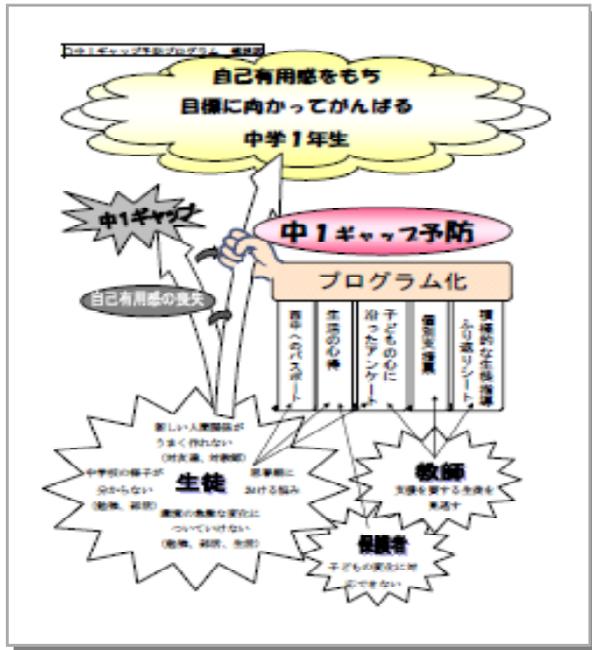


図1 研究の構想図

3 具体的な実践

(1) 早期発見から支援への手立て

ア 子どもの心に沿ったアンケートの作成

子どもの内面の不安やストレスを早期に発見できるように、生活アンケートを活用している学校は多い。気になる児童・生徒を把握し、適切な配慮の下、具体的な手だてを講ずることができる。

今回は、市内不登校生徒の月例報告から5月、9月、1月の長期休業明けに不登校生徒の出現が増加していることから、その前の4月、7月、12月に実施することとした。実施方法や結果処理が簡便で、かつ、指導に有効な定期的な「生活アンケート」を開発することが重要であると考えた。不安や悩みを抱える児童生徒の早期発見に努め、さらに、集計

中1ギャップ予防プログラム

時期	プログラム	具体的な支援
小学1年生 ～中学1年生	「生活の心得」による基本的な生活ルールやマナーの指導	
小学6年生	毎月末、不登校相当、準不登校児童をピックアップ：個別の支援表作成	
	12月 生活アンケート	分析と指導：中学校生活への不安・悩み
	2月 パスポート配布	中学校1年生の生活を具体的に解説
	3月 引継：不登校傾向児童の「引継資料」を準備→中学校へ	
中学1年生	毎月末、不登校相当、準不登校生徒をピックアップ：個別の支援表作成	
	4月 「学級開きにおける指導の振り返りシート」で振返	
	4月末 生活アンケート	中学校適応度・新クラスの適応度
	7月初旬 生活アンケート	部活動・学級内人間関係・行事満足度
	学期末 「授業に生徒指導の機能を生かすための振返シート」で振返	
	12月初旬 生活アンケート	部活動・学習適応度・行事満足度
	学期末 「授業に生徒指導の機能を生かすための振返シート」で振返	
	3月初旬 生活アンケート	部活動・学級、部活動内の人間関係
	3月中旬 引継：不登校傾向生徒の「引継資料」を準備→次学年へ	
	学期末 「授業に生徒指導の機能を生かすための振返シート」で振返	
3月末児童生徒全員に 不登校相当、準不登校児童生徒の確認		

図2 中1ギャップ予防プログラム

して学級や学年の全体の傾向をつかみ、指導に役立てるものである。分析結果は、グラフ化して、全体的な傾向を視覚的にとらえやすくし、学年・学級通信、学年集会等で発信できるようにした。一人一人を大切に学校の姿勢を子どもたちに伝えるとともに、保護者に対しても子どもたちの様子を知らせ、家庭でのかかわり方等に参考にしてもらった。

また、アンケートの結果を、全体の傾向としてとらえるだけでなく、一人一人の個人データとして残し、4月からの学級に対する満足度の変化を、子ども自身が振り返ることができるような「個票」を作り、データを反映させた。

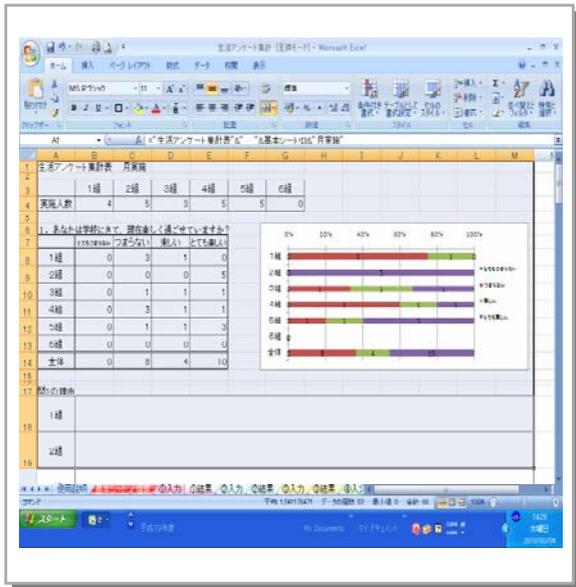


図3 アンケート入力・集計用紙

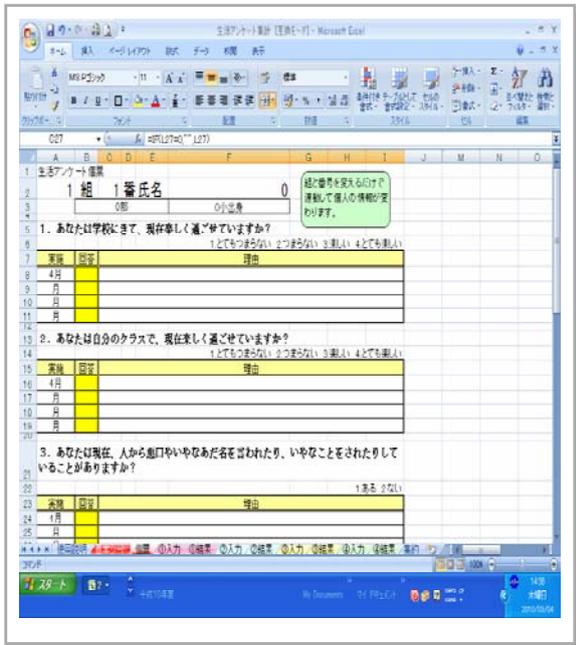


図4 アンケートの個票

イ 「出席状況による不登校相当・準不登校生徒のスクリーニングシート」の作成

「出席状況による不登校相当・準不登校生徒のスクリーニングシート」は、出席簿をもとに出席状況を入力し、欠席だけでなく保健室登校や遅刻・早退数も考慮した準不登校、不登校相当などの不登校傾向のある生徒を数字として捉えることができる。月例報告には挙がらない不登校予備軍の生徒を見落とさず、配慮を要する生徒として指導につなげることを目的としたチェックシートである。

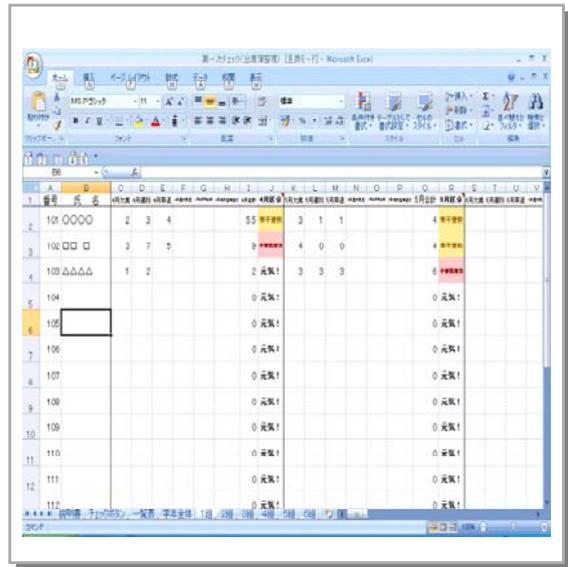


図5 不登校相当・準不登校児童スクリーニングシート

ウ 個別カルテ・個別支援票の開発

上記ア・イの早期発見の手だてから、問題の傾向が見つかった場合には、担任一人が抱え込むのではなく「予防プログラム」に従って、組織として方針を立て支援し、その経過を「個別カルテ」に記録し、継続的に支援したり情報を共有したりするのに活用した。

「個別カルテ」は、生徒一人につき1つのデータファイルにまとめ、月ごとの欠席や早退などの状況が継続して分かるようにし、さらに、毎日の指導記録がメモできるようなシートも加えた。

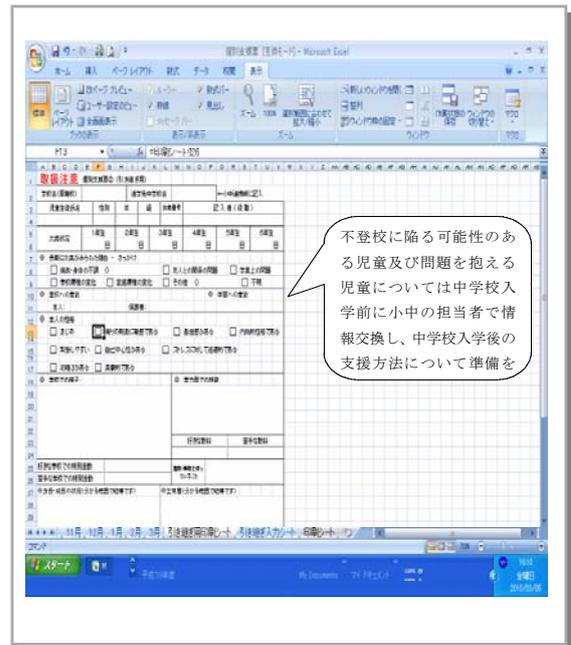


図6 個別支援票

また、「個別支援票（小中連携用）」は、子どもたちの小学校生活の情報から、内面に隠れている不安やストレスをいち早くキャッチするとともに、過去の指導を生かしながら継続的に働きかけていくことをねらいとする。

個別カルテ・個別支援票とも、これまで各校でそれぞれ使用していたものの様式を整え、中1ギャップの予防的な内容を網羅し、かつ使用しやすく、保管や引継にも有効になるよう考えた。

○「早期発見から支援への手だて」の成果

「生活アンケート」では、生徒一人一人の学校や学級への思い、不安や悩みを教師が把握することができた。アンケート実施後に不安や悩みを抱える生徒に対し、声をかけることができ、問題に素早く対応することができた。また、スクールカウンセラーとの面談希望について生徒の意志を確認し、面談を素早く実施することができ、担任とスクールカウンセラーとの連携を図ることもできた。生活アンケートの集計シートは4回分のアンケートを1つのファイルに集約できるように「個票」を作成したことで、結果を一覧でき、生徒の悩みや不安の変容を見ることができるようになった。

また、生活アンケートと不登校相当・準不登校スクリーニングシートを活用し、配慮を要する生徒を早期に発見し、指導カルテの作成を含めた早期対応ができた。

「個別支援票」は3月の小中学校の引継会

議の際に使用し、日常の指導や、学級編成などに活用できた。資料をもとに、話し合うことで、これまで口頭で説明していたことを、客観的な事実に基づいて、短時間で確実に伝えることができた。また、受け取った中学校側は、すべての小学校の様式が同一であり、入学後の個人カルテを入学前に簡単に準備することもできるようになった。

(2) 中1リーフレットの作成

中学校進学を意識し始める2学期に、3校の小学校6年生を対象に、中学校に対する期待や不安、悩みを表出させることをねらいとし、アンケートを実施した。すると、全体として中学校進学が不安・やや不安と答えた児童は約4分の一であった。その内容は、「学習」「友達」「部活」についての不安や悩みが多く、小学校ごとにその具体的な内容に差が見られた。

そこで、不安や悩みに答えつつ、中学校の様子を理解し、自信を持って進学できるように「中学1年生用の学校紹介リーフレット」を作成した。より実態に即した具体的な内容にし、6年生の目線で親しみやすく安心感を持てるような表現にした。3学期の入学説明会に配布し、学校紹介の時に利用するとともに、保護者にも一緒に目を通してもらえるようにした。

また、入学説明会後も大切に保管し、小学校の学級活動や、中学入学後のオリエンテーション等にも活用できるように工夫した。



図7 中1リーフレット

○中1リーフレットの成果

その後の子どもたちの意見から、「中学校への不安を減らすのに役立った」と約7割が、「小学校と中学校の違いを知るのに役立った」と約8割の児童が回答した。「勉強について、テスト順位が出ると書いてあったので、たくさん勉強する」など、中学校での具体的な目標を持つことができた子どもも見られた。「友達」のページも「さそい方の例が役に立ちそう」「違う小学校の子と仲良くなれるかが心配だったから役に立った」など、前向きにとらえる様子が見られた。

小・中学校の教職員からは、「内容やレイアウトがよく、このリーフレットが中学校入学を控えた児童の不安解消に有効である」という意見が多かった。

中1リーフレットは中学入学前の6年生の不安を解消し、見通しを持たせることに有効だったと考えられる。

8. このパスポートのどこが一番役に立ちましたか。また、もっと知りたいことはありますか。意見や感想を書いてください。

私は友達が多くて不安だったので友達のページで先輩からのアドバイスが役に立ちました。不安がなくなりました。順位が出ると書いてあったので、たくさん勉強しようと思いました。

部活に入るのが不安だったので「先輩から」というところを見て、部活を選ばずになりました。勉強についても「中間テスト」や「期末テスト」があって、順位が出ると書いてあったので、たくさん勉強しようと思いました。

「新しい友達」のページを見て、どうゆうふうにして話しかければいいかなどと思いました。さんこうになったのでよかったです。

図8 子どもの感想

(3) 「生活の心得」の作成

小学校6年生のアンケートから、制服や頭髪、持ち物、言葉遣いについてのルールなど、「中学校は厳しい」というイメージを持っている子が多いことが分かってきた。そこで、生活のルールやマナーについては小学校入学から、子どもの成長発達に合わせて、計画的・系統的にステップアップさせていく指針となるようなものが必要であると考えた。

また、校区内の各小学校の実態の違いや、毎年の教員の異動などもあり、同じ歩調で継

続して活動を行うことは容易でないことから、小・小、小・中、学校・家庭の連携体制を整え、それぞれの教員と保護者とが同じ方向を目指して子どもたちを指導・支援していくことは、様々な「ギャップ」を生まないために、重要であるといえる。

そこで、小・中学校9年間を通して、各校の教員とそれぞれの保護者とが共通理解を図りながら、子どもたちの基本的な生活を指導・支援するための指針として「生活の心得」を作成した。これまでの各小学校と中学校の様々な教育活動や各校の基本的なきまり等を整理・統合する形で、9年間が見通せる一覧表にして整理した。項目は家庭学習・生活・行動・安全とし、文面は子ども向けとした。

○「生活の心得」の成果

その後の保護者のアンケートでは、「子どもが小・中学校の9年間の望ましい姿を見通せる内容になっている」と答えた保護者が95%、「『心得』に従って成長できれば、中学入学時に、小学校生活とのギャップに悩まず生活できる」と答えた保護者が70%であった。

当該の小・中学校の教職員へのアンケートでは、「子どもたちが小・中学校の9年間の望ましい姿を見通せる内容になっている」、「この『心得』は、教師が保護者と共通理解を図って小・中学校9年間を指導する指針となっている」と答えた教職員が9割を超えた。

これらの結果から、さらに小・小、小・中、学校・家庭の連携を進めて、内容やレイアウト、配布時期など、より実態に合った心得に改善していけるとよいと考える。

The table is a grid with multiple rows and columns, containing detailed text and illustrations. It is titled '生活の心得' (Life Guidelines) and is organized into sections for different aspects of student life.

図9 生活の心得

(4) 「生徒指導の機能を生かした指導の振り返りシート」の作成

生徒指導の3つの機能は①児童生徒に自己決定の場を与えること。②児童生徒に自己存在感を与えること。③児童生徒との共感的人間関係を育成すること。以上の3つの生徒指導の機能を生かした指導を心がけることにより、自己指導能力を育てることが重要である。

「生徒指導の機能を生かした指導の振り返りシート」は学級開きから日常の授業をはじめ学校生活全般に渡って、教師が、生徒自身の居場所を見つけられるような指導ができていくかの振り返りを定期的に位置付けた。

【中1担任用】学級での活動に生徒指導の機能を活かすための振り返りシート
【4月：学級開きにおける振り返り】～初めの1週間が大切です～

活動名	No.	確認	活動内容	評価
呼名	1	A	一人一人の良さや特長を事前に調べたか	
	2	A	間違わずに呼名できたか	
	3	A	返事や態度から生徒理解が深めることができたか	
	4	A	一人一人の抱負を採るよう工夫したか	
	5	A	お互いの話を聞き合う雰囲気を作ったか	
自己紹介	6	A	子どもたちが休むことを考えて和やかにできたか	
	7	A	質問には可能な限り答えることができたか	
	8	A	1年間のクラスの方針・約束について明確に示せたか	
担任紹介	9	D	クラスで大切にすること明確に示せたか	
	10	D	クラスでしてはいけないこと明確に示せたか	
	11	C	中学生になっての心構えをしっかり共有するために作文を書かせたか	
所信表明	12	A	構成的にカンファスターなど人間関係を築くためのエクササイズを実施したか	
			(例) いよいよと挨拶、誕生日サークル ・() ・() シェアリング(自分の中に生まれた感情や考えを話し合う)を行う	
中学生になって	13	D	学校の構造や教室、特別教室等の配置や危険な場所について知らせたか	
	14	C	1年間の学級目標を話し合わせたか	
人間関係づくり	15	D	用紙や発表・掲示方法を工夫したか	
	16	D	個人目標の振り返りの時間を定期的にとっているか	
	17	D	決め方を工夫したか	
	18	CD	1年間の学級目標を話し合わせたか	
学級目標づくり	19	BD	用紙や発表・掲示方法を工夫したか	
	20	CD	振り返りの時間を定期的にとっているか	
	21	D	学級委員の役割について話し、伝えたか	
	22	D	立候補がなければ選定するが、1学期初めは、教師側でも案を持って臨んだか	
学級役員決め	23	D	決め方の方針を示したか	
	24	D	係活動の必要性について話し、伝えたか	
	25	D	初めなので中学校の係の形を教師が示した(仕事の内容も)	
	26	C	必要な係を考えさせたり、役割について調べさせたか	
係決め	27	C	話し合っで決定させたか	
	28	C	話し合っで決定させたか	

図11 学級開きにおける指導の振り返り

○「生徒指導の機能を生かした指導の振り返りシート」の成果

当該の中学校の教職員へのアンケートでは、9割以上が役に立ったと回答した。

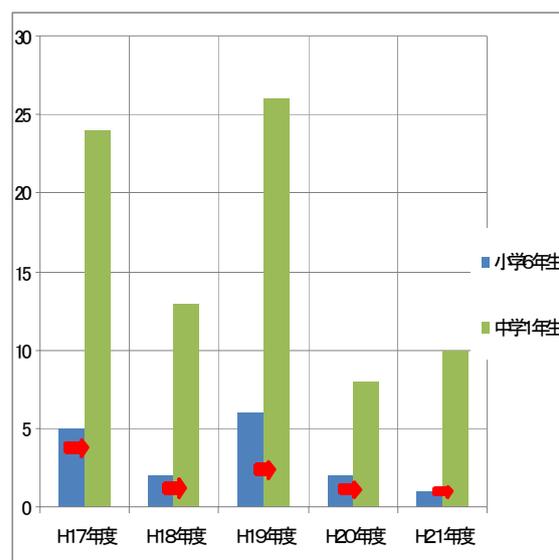
- 年度始めにやるべきことが見やすくなっており、やり忘れがチェックできて良かった。(女性)
- 呼名や気をつけるべきことを事前に確認できた。(女性)
- 長年やってきて生徒指導の機能という意味を意識していなかったが、一つ一つの手立てが改めて意識化できた。(男性)

図10 教職員の感想

4 まとめ

「中1ギャップ予防プログラム」により、中学校入学前から入学後に発現する子どもたちの不安や悩みを抑制したり、早期に発見したりできる積極的な指導・支援を、今まで以上に可能にすることができたと思われる。

表1 藤岡市における中1ギャップの状況



藤岡市における平成17年度から平成21年度の中1ギャップ(中学1年生年間30日欠席不登校生徒数人数)を表したグラフ(表1)からは、19年度以降減少していることが分かる。この「中1ギャップ予防プログラムの取組」が全ての要因とは言えないが、各校の小中連携の取組の成果は確実に現れており、本研究がその一助となっている。

今後、小学校6年生と中学校1年生という2年間を考えるだけでなく、小・中学校の9年間という広い視野で子どもたちにかかわっていくことで、さらになめらかな接続ができていくであろうと考える。

小・中学校間の連携、さらには家庭との連携を進めていく中で、子どもが自信を持って自分で前へ進んでいく力を身に付けることにより、不登校生徒の出現を予防できると考える。22年度は、本研究をもとに、藤岡市の全ての各学校区に、「中1ギャップ予防プログラム」を広げていくために、北中学校区での実践、研究を進めている。